

#### オープニングイベント

2008 土から生える art in mino'08を振り返って

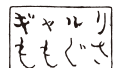
登壇 伊藤慶二・内田鋼一・森北伸・高橋綾子

日時 10.8 sat 15:00-16:30

詳細はホームページをご覧ください。

#### schedule

10.29 sat- 11.6 sun one room exhibition:  
atelier scrumpcious  
11.12 sat, 13 sun 交種茶会: 菓子屋ここのつ・安藤雅信  
11.19 sat- 12.18 sun 百のギフト  
1.14 sat- 1.29 sun 百草冬百種展



〒507-0013 岐阜県多治見市東栄町2-8-16  
tel. & fax. 0572 21 3368  
<https://www.momogusa.jp>

多治見ICより車で10分 / JR多治見駅北口よりタクシー12分  
(JR多治見駅より東鉄バス13分「高田口」下車1km)

#### momogusa cafe

伊藤慶二展 ライトランチメニュー  
11:00-18:00 (L.O 17:30) メニュー・席の予約不可



特設ページ



土から生える 2

## 伊藤慶二展

2022.10.8 sat-23 sun

11:00-18:00 10.12 wed, 9.18 tue 休廊

伊藤慶二 ————— 在廊日:10.8 sat  
鎮魂シリーズ、土偶シリーズ、仏手、写経、  
平面作品、茶道具、厨子(仏堂)ほか

オープニングイベントに関しては背面をご参照ください。

galerie  
momogusa

百草

慶二さんに会ってから40年近く経ち、作家としてずっと目標とさせて頂いている。食器から立体、平面作品や書など多面的な展開をされている上に、それぞれを独自の技術で深めて仕上げていますので、こだわりのない自由さと表現の多様さに付いていくのが精一杯である。近付けば近付くほど距離が縮まるどころか、どんどん離れていく印象だ。87歳の今日でも、個展はほぼ毎回新作。それに新しいことや素材にチャレンジし続けていらっしやる。

個展の為に作るのではなく、ご自分の中にいくつかのシリーズものが存在しており、それらを新規継続されているのだ。長期ではヒロシマ・ナガサキシリーズ。土偶シリーズに加え、ここ10年くらいは面シリーズ。それに茶盃や壺、仏手シリーズが加わる。更に平面作品も幅を広げ、油絵、オイルパステルなどなど、書き出したらキリがない。どの作品も楽しさが伝わってくるものばかり。制作と生活が完全に一体化し、日常の気付きが制作にいつも反映されている。特に土偶は楽しくてしょうがないと言う。長らく土偶は考古学の対象とされてきたが、「生活から生まれた日本の彫刻のルーツである」と慶二さんは美術の解釈も自在である。

最近の平面作品の充実ぶりには目を見張る。元々、油絵科のご出身ではあったが、和紙にオイルパステルで描いた後、ペインティングナイフで押さえ付けるというオリジナルの技法に発展している。平面と立体の境界線などなく繋がっていて自由に横断し、心がどんどん自在になっている感じ。若い頃からの造形体験が、生き生きと跳ね回っているのだろう。

良い意味で慶二さんの個展は完成された途中経過である。今展もどんな現在進行形が観られるのか楽しみだ。

\*2018年10月に行われました、百草20周年記念企画「伊藤慶二展」展覧会図録を、今回の展覧会に合わせ制作しております。



伊藤慶二

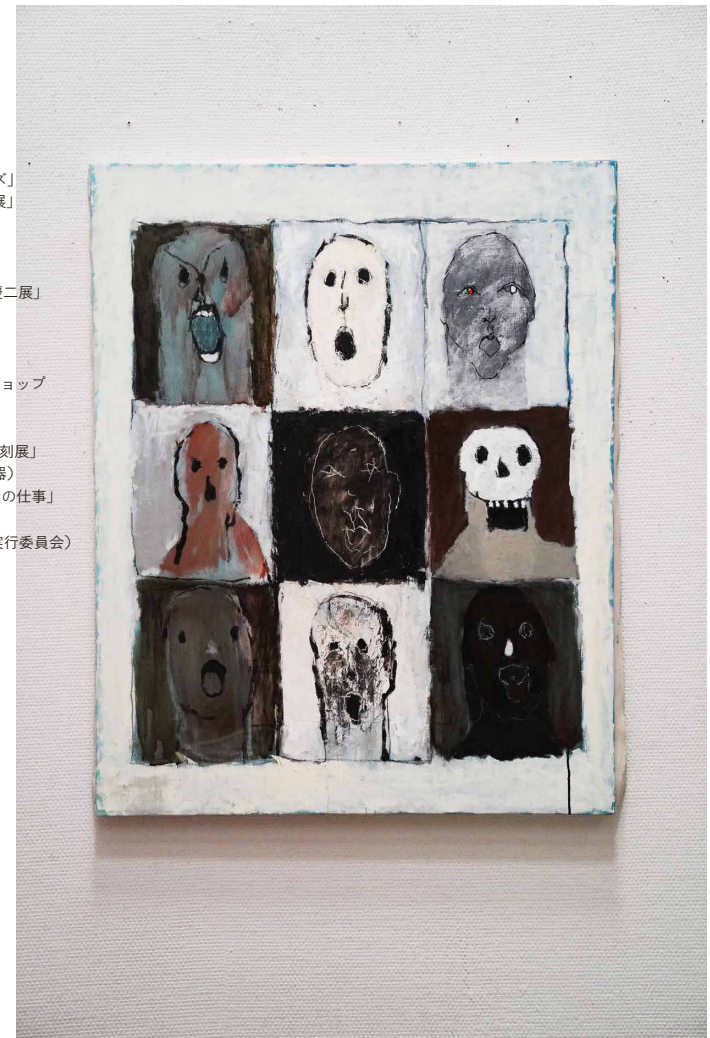
\*百草での展示

〈個展〉

- 1998 10月「伊藤慶二展 1965-1998」
- 1999 8月「伊藤慶二展」ヒロシマシリーズ
- 1999 10月「開廊一周年記念 食のうつわ展」
- 開廊1周年記念 佐々木志年 料理会
- 2002 10月「伊藤慶二展」尺度シリーズ
- 2008 8月「伊藤慶二展」つら・づら
- 2018 10月 百草20周年記念企画「伊藤慶二展」
- 2022 10月「伊藤慶二展」

〈グループ展ほか〉

- 2000 1月 スタジオMAVOにて、ワークショップ
- 2001-2012 干支香合を制作
- 2001 7月「写しの美学」
- 2004 11月「人形(ひとがた)風景の中の彫刻展」
- 2005 7月「夏のお茶展」(彫刻・茶器・食器)
- 2006 12月「山田節子さんが選ぶ 器置ある7人の仕事」
- 2008 aim'08「土から生える」展  
(国際陶磁器フェスティバル美濃 aim'08 実行委員会)
- 2013 9月「お茶の愉しみ お酒の悦び」



造形物と祈り

安藤明子

1998年10月、百草の柿落としの展覧会から、慶二さんの作品世界を拝見している。初めて慶二さんの食器を手にした衝撃は忘れられない。目から鱗が落ち、自分が求めていきたいものと完全に繋がった。

慶二さんの手から生まれるもの、食器と彫刻の区別なくそれは等しく造形物として美しい。上面、底面という区別がなく、口造りから高台内に至るまで全てが造形物として繋がっており、一客の湯呑みや小鉢も彫刻として存在する。

繰り返されるモチーフでシリーズ化している作品の中で、仏足と結界、地藏、五輪塔など、祈りの象徴としての造形物があるが、長どの時代も独自の解釈とユーモアが加わり慶二さん自身の造形物となっている。山田節子さんが慶二さんに「仏堂」(制作: 厨子屋)を依頼されたことも慶二さんの作品から自然な流れであったと思う。

家や仏壇を引き継ぐ時代はもう終わるのかもしれない。大切な人を想い、魂を鎮め、手を合わせる場所。天上に繋がる装置の様な存在が家の中にあることは、今生を生きる人にとっての拠り所となるのではないかと思う。今展にも出品がなかった仏堂だけでなく、慶二さんの手から生まれるものは、掌に載るほどの一体の彫刻も、一幅の絵画もそんな存在になり得るに違いない。